

(1) 呪詛と祝福

呪詛と祝福

——ケニア・テソ族のイカマリニャン・クランを中心に——

長 島 信 弘

1 序

本稿の目的は、ケニアのテソ族のクランで、呪詛行為を公認されているイカマリニャンに関する民族誌的資料⁽¹⁾の提示を中心とし、併せて、東アフリカにおける「呪詛」と「祝福」の比較研究のための初次的展望を行うことにある。ここで用いる「呪詛」と「祝福」という二語は、それぞれ curse, blessing という英語の翻訳であって、日本語の慣用的意味とは必ずしも一致しないかもしれない。東アフリカの比較文化的研究を試みる際に利用できる基本的資料の多くが英語で書かれていること、この英語の二単語で指示されている社会・文化現象には相対的

に共通性が高いと思われること、という二点が、この二語をいわば「見出し語」として採用した理由である。いいかえれば、この二語がそれぞれ明確に定義しうる、画定された意味領域をもつことを前提にしているわけではない。またこの二語に翻訳されてきたアフカリ諸言語の対応単語が同じ意味をもつと考えているわけでもない。そのような前提に立つことはむしろ比較を恣意的なものにする危険を伴うからである。たとえば、一つの個別言語において、curse と訳されうる、しかも相互に意味内容の異なる複数の単語が存在することを考えてみればよい。重要なことは、まず個々の単語（アフカリ諸語における）が用いられる社会的脈絡において、その意味を把握

することにあらう。

とはいえ、この二語の一般的意味を操作上の枠組として用いることは必要である。それは厳密な定義をもって現象を画定するためではなく、対象とすべき現象を「発見」するためである。手元にあるCOD(一九七六年版)によると、

curse (n.): Utterance of deity or of person invoking deity, consigning person or thing to destruction, divine vengeance, etc.

bless (v. t.): consecrate; call holy, adore, (God): pronounce words held to bring divine or supernatural power upon; invoke God's favour on,.....

とある。呪詛 (curse) とは、ここでは、神の力、あるいは神自身を背景に、ことばを媒介として行われる「正当な」神秘的攻撃であるとされている。日本語では漢語の「呪詛」のいいかえである「のろい」という語には、この「正当性」の感覚が必ずしも伴っていないし、神性との関係も明確ではない。

祝福 blessing は呪詛と対をなす概念であり、神の力

を通じて対象にプラスの影響を与えようとする行為と理解できる。つまり、「呪詛」も「祝福」も、ともに神の正義、倫理、いいかえれば、当該社会の中心的価値規準、道徳性とかかわるものという枠組を設定しうることになる。呪詛とは不当な侵害に対する「正当な」報復である。

この意味で呪詛は一方では邪術(広義のウィッチクラフト)と対立し、他方では宣誓(oath)と補完的關係を成すことになる。宣誓とはしばしば「条件づきの呪詛」に他ならないことがある。邪術とは「不当に」他者を神秘的手段で攻撃することとしておく。もちろん、何が「正義」「正当」であるかという判定はどの社会においても相対性を有していようし、ある人物にとっての正義は他者には「反社会的」にみえることもあらう。しかし本論で対象とする現象は、そのような社会的認定の状況によって左右される相対的な正当性の問題ではなく、その社会において正義の側に観念的に位置づけられている神秘的手段なのである。

2 イカマリニャン——概況

ケニアのテソ族には約二十五のクランがあり、イカマ

(3) 呪詛と祝福

リニヤン *Ihamanyang* もその一つだが、伝承によれば、このクランはイクルク・クラン *Ikuruk* から分れたものだという。〔以下に述べるこのクランについて資料は、同クランの長老オカンボ氏からの聞き書き（一九七七年九月）と、同クランの呪詛司祭 *lobelaman* ヤコボ・イボティカイ *Yakobo Ipotikai* 氏からの聞き書き（一九七九年十二月）を中心としている。⁽¹⁾〕

現在このクランはケニアのウエスタン・プロヴィンス、ブシア・ディストリクトの北テソ・ロケーションと南テソ・ロケーションに分れて住んでおり、北テソ・ロケーションでは、コラニヤ・サブロケーションのカケメリ、カマリニヤン、チャマシリ地域に集中的に住んでいる。人口は不明だが、呪詛儀礼に参加するのは二十人前後というからクランとしては小さいものである。

クランの始祖はオロネ *Orone* といい、ウガンダのソロティ近くでイクルク・クランから分れたという。呪詛を始めたのはこのオロネで、イカマリニヤンというクランの名は、*ahikamar*（捕える、とってくる）と、*ahinyang*（報復する）という語から合成されたものだ、という。つまり「報復者」の意である。ウガンダ（北部テ

ソ族）のソロティから移住を始めたのはオロネから呪詛司祭の職を継いだンゴシラ *Ngosila* の時で、ウガンダのトロロで定着し、その後このクランは三つに分れた。トロロに残った者、ケニアの南テソ・ロケーションに定着した者、そして北テソ・ロケーションに定着した者たちである。歴代の呪詛司祭の名は次の九名である。

- ① オロネ、② ンゴシラ、③ オカリオ (*okatio*)、④ オチエモキトゥク (*Oemokituk*)、⑤ オドンガ (*Odonga*) (一九四〇)、⑥ イングル *Inguru*、⑦ オルカン *Orukan*、⑧ エバエ *Epaē*、⑨ イボティカイ *Ipotikai* (一九七〇)
- ― 現在トロロ側（ウガンダ）の司祭はエキサ (*Eksa*)、ケニア南テソの司祭はオコモル *Okomol* という。

ウガンダの北テソ族の呪詛集団イスレタは植民地時代に呪詛行為を非合法化され、断圧をうけたが、ケニアのイカマリニヤンは全く政府の介入を受けずに活動していたという。このクランの活動には *ahiam* と *ahigat* という二種があり、前者は「呪詛」、後者はイボティカイ氏によれば「祝福」である。しかしこの「祝福」は一般的なものではなく、後に述べるように、不妊および男児

不出産という状況を変更するものに限られている。

呪詛の対象は、主として盗みと放火の犯人であり、(犯人が特定されていない場合も含む) この他邪術をかけた者を対象にすることがあるという。いずれの場合も「犯人」が他の種類の制裁を受けていない場合に呪詛の依頼が行われるのである。

3 イカマリニヤンの呪詛の方法

何かを盗まれたり、家に放火されたりして被害を受けた者で、犯人を他の方法で捕えたり罰したり、賠償を獲得したりできなかった人物は、その報復をイカマリニヤン・クランの者に依頼する。こうした依頼はすべて司祭に伝えられ、司祭は儀礼を行う日をクランの既婚男子成員に連絡する。

訴人は黒い雄ヤギと黒いオンドリ、黒い雄牛を用意し、また犯人に心当りがある場合には、夜こっそり犯人の住

居に行つて、犯人の身につけていた物か、毛髪か爪などを取ってくる。(犯人不明の場合にはむろんこの手続きは省略される)。

イカマリニヤンは早朝訴人の家に集まる。笑うと呪詛の力がなくなるので、若い女性や子供は遠ざけられる。火が焚かれると、司祭は生きたままの黒い雄ヤギの頭部をもち、助祭(現在はイサイア氏)が後肢をもって火の上でゆっくりとあぶりながら、呪言を唱える。この場合、まず訴人に呪いがけられるのである。もし訴えが偽りならば、死ぬのは訴人ということになる。(そもそも訴人は訴えたときに何故特定の人物を犯人と考えるかについて理由を述べなければならぬのである)。このような呪言はいくつか集めたが、それぞれ少しずつ内容が異なるので記録に残すために典型的なものをいくつか紹介しておく。第一のものはオカンボ氏に聞いたものである。

(呪言1)

Aya, idan siang akikannun iboro ketwan ka je,
poi

(呪言1の訳)

われわれはその人物(容疑者)の物を集めた。ポ
ー!! (間投詞)

(5) 呪詛と祝福

Kere ijo tenteni ijo kakiro nu kotwana! kotwana!

Adaun ere? Adaun. Adaun ere? Adaun.

Ajara? Mam. Ajara? Mam.

Aya, ijo lo iyant ilami lo, ijo lo iyant ilami lo,
ijo de kere kiganut etwan je ijo de kodaun, pol.

Adaun ere kon?

Ajesu akwapa cucu? Cucu. Cucu? Cucu.

Kere kiganut ijo tenteni, pol

Ngai ejeni ijo elope?

この呪言の後半部は訴人に向けられたものである。容疑者に対しても、訴人に対しても、仮定法が用いられていることが注目をひく。テソ語の *akilam* (呪詛する) という語は、このように「誰か」に向けてよびかける行

もしお前(容疑者)が悪事を働いたというのが事実なら、死ね、死ね、

彼の家庭は滅びたか、滅びた。彼の家庭は滅びたか、滅びた。

彼は生き残ったか、いいや。彼は生き残ったか、いいや。

さて、この呪詛をもたらした汝よ、この呪詛をもたらした汝(訴人のこと)よ。もしお前が偽りの告発をしているのなら、お前も死ぬのだ、ポー。

お前の家庭は滅びたか。

この世は(その人物にとって)闇になったか、闇だ。闇になったか、闇になった(死が訪れたの意)。

もしお前が偽りの話をもってきたのなら、ポー。

誰がお前のことを知っていようか。(真実を語るの
はお前次第だの意)

為を意味するようであるが、これは後で *lam* という語根の比較文化的考察のところでふれることにする。次の呪言2は、司祭イボティカイ氏から聞いたもので黒ヤギを焙りながら犯人を呪うことばである。

(呪言2)

Po! Keji etwan elemarit ibore kon, Orone, Ngosila, ngai elemarit ibore ketwan ka lo?

Erwo ekoro! kakim. Ngai elemarit?

Erwo ekoro! kakim. Emabir lo kelemari ibore ngin etogo ken kodaun! kodaun!

Etogo ken kibilerei! kibilerei!

Etogo ken agolo! Agolo! Orone, Ngosila.

Basi, erwo ekoro! akim bon. Emabir lokigwoki ibore ngin etogo ken kodaun, po!.....po! po!.....po!

Etogo ken adaun? Adaun.

Orone, Ngosila, etogo ketwan ka ngolo adaun.....adaun.

Apiari? Apiari. Adaun etogo ken kapiari.

ヤギが火の上で死ぬと、次は黒い雄鶏を同じように焼き殺しながら同じような呪言を唱える。

(呪言2の訳)

お前(訴人)の物を盗んだ者がいるならば、オロネよ、ンゴシラよ、この男の物を盗んだのは誰だろうか。

ヤギは火の上でうめいている。盗んだの誰か。

ヤギは火の上でうめいている。盗んだ者の家庭を破壊させよう。破壊させよう。

彼の家族を発狂させよう。発狂させよう。

彼の家を閉ざしてしまおう。閉ざしてしまおう。オ

ロネよ、ンゴシラよ、

さあ、ヤギは火の上でうめいている。

その物を盗んだ者の家庭を破壊させよう。ポーポー

彼の家庭は破壊したか。破壊した。

オロネよ、ンゴシラよ、その男の家庭は滅びた。滅

びた。

全滅したか。全滅だ。彼の家は完全に消滅した。

そのあとで一同全裸になり、輪になって膝を地につけ、尻を(肛門が見えるように)浮かせ、顔を地に伏せて再

(7) 呪詛と祝福

び呪言を唱える。

(呪詛 3)

Etogo ka nuta ngol kodauuni, etogo ka nuta
ngol kodauuni.

この後で、一同地に倒れて泣く。それは葬式の様子の再現であり、呪詛の対象となった男の家に死が訪れることを意味している。呪詛の効果は、連続死をひきおこすことにあるといわれている。犯人の家族の者が次第に死んでいき、犯人は最後になるというのである。

この呪言が終ると、クランの者たちは何種類かの植物(木)を集めにいく。司祭イボティカイ氏によると、そ

(呪詛 4)

Orone, Ngosila kejei itwan ekokoit ere ngolo, ere
ken kodauuni. Adauuni,.....adauni.

Orone, Ngosila, kejei itwan emunaut neni ere ken,
poli...poli

(呪言 3 の訳)

誰その家庭よ、破滅せよ、(くり返し)

これは次の三種である。

① エポポン epopong ユーフオビア

② エチクワ ecikwa アロエの一種

③ エボカイ epokai 宿り木の一種

この三種の木を小屋の前に植えながら次のような呪言を唱える。

(呪言 4 の訳)

オロネよ、ンゴシラよ、もしこの家から何かを盗んだ者にいるなら、その者の家庭を破滅させよ。破滅した……破滅した。

オロネよ、ンゴシラよ、この家でなにか悪事を働いた者がいるなら、ポー、ポー。

Itunga ken kodanos, kodanos. Inyamen koma-mutu. Akituk komanutu.

植えた木に根がつき、成長する限り、呪詛をかけられた者の家族は死んでいくといわれる。

オカンボ氏によると、この日集められるのは次の五種の植物である。

① エボボン、② エボロト *ebolat* 「不運の木」とよばれる。③ エリゴイ *eligo*、④ エテライ *eterei* 「双子の木」、⑤ エラミト *elamiti* (ひょうたん、この名と *akiam* 呪詛するという語とは関連があるものとされている)

オカンボ氏は、これらの植物は訴人が「犯人」の所から取ってきたものと混せて、新しいひょうたん *abusia* の中に封じこめるのだという。したがって、イボテカイ氏とオカンボ氏のくい違いは、植物の用法の違いと思われるがこの点再調査を必要とする。イボテカイ氏に質問したところ、エテライは双子儀礼にしか使わず、またエラミトの木は、このクランによる呪詛ではなく、個人的呪詛に用いるものだという説明を与えられた。

そいつの家族を全滅してくれ。全滅してくれ。そいつの家には食物がないようになれ(作物ができないように)。牛がいなくなるようになれ。

「物」とこれらの植物を束ねた包みは、やがてはひょうたんに入れて、司祭の主妻が管理することになり、このひょうたん自体が「呪詛」とよばれるのだが、それがいかに効力をもつためには、訴人はその夜ひそかに「犯人」の家に行き、この包みで家に触ってくるとよいという。

この日殺したヤギとニワトリはすべてイカマリニヤン・クランの成員のものになり、訴人はその肉を要求してはならないとされる。

呪詛が成功し、犯人の家族が死にはじめると、訴人は謝礼として牛を一頭イカマリニヤンクランに与えるという。

4 解呪の方法

自分の家族に死が続いて訪れると、誰もが呪詛をその原因ではないかと考えるようになる。占い師にみてもらうこともするが、自分の過去の悪事が原因だと確信し、

(9) 呪詛と祝福

かつ呪詛の力を解いてもらいたいと決断した人物は、イカマリニヤン・クランに接触してその旨依頼する。これには、黒い雄牛、黒い雄ヤギ、黒い雄鶏と、現金三〇〇シリングほど(約一万円)。別に被害者(訴人)への賠償としてかなりの数の牛(七—一〇頭という)を用意しなければならぬので、相当の負担である。

解呪の儀礼は黒い雄牛の供犠から始まる。このときまず角笛 *sosoi* を吹く。司祭は小屋の中にナイフをもって隠れていて、依頼人とのやりとりや牛の受け取りなどはすべて使者を介して行う。用意が出来ると、司祭は生きのまま地面に倒されている牛のところへいき、ナイフでその鼻面を叩きながら、過去の司祭たちの名と、出席しているクランの長老たちの名をよびあげる。このナイフはこの目的のためにだけ使う。このあと司祭は小屋の中に入り、外では牛は首を切られて殺される。

牛を解体すると、胃袋を開いて未消化の草 (*thugui*) もっとも神聖な力をもった物と考えられている) をとり出し、依頼人の顔、胸、手足にこれをぬる。これは「冷やす」行為といわれる。呪詛により「熱く」(危険) になっている状態を中和することである。次に黒いヤギ、黒い

ニワトリが殺され、いずれもクランの者たちが共食する。この後で「呪詛の物」すなわち、司祭の妻が保管していたひょうたんを川に捨てる。放火の場合にはとってあった灰も捨てるのである。この川に捨てることも「冷やす」という。この後で依頼人(犯人)が訴人に賠償の牛を渡せば、呪詛はその力を失い、もはや死が襲うことはないという。

5 イカマリニヤンの祝福

イボティカイ氏が「他人に幸福をもたらす行為」と定義したイガテン *igaten* (動詞は *avigat*) という行為も、イカマリニヤン・クランの独占する神秘的作業の一つである。これには、(1)男子の生れない妻に男子を授けること、(2)子供の生れない妻に子供(男児)を授けること、の二種がある。どちらも男児をもたらすという点では同じようにみえるが、後者は不妊の原因を追求するという点で、第一の場合と異なる。資料は第一の場合がイボティカイ氏、第二の場合がオカンボ氏の語ったことである。

(1)、女兒ばかり生んだ妻に男児を生ませること。
父系制のテソ社会で、男児をもたないことは父にとっ

ては自分の系譜の断絶を意味するし、母にとっても娘は嫁に行ってしまうから(婿養子の制度はない)淋しい思いをしなければならぬ。理想は男児と女児が同数生れることだが、現実には生れてくる子の性が一方に偏ることとがしばしばある。

娘ばかり生れて、どうしても男児が欲しいと思う母親はイカマリニヤン・クランに相談に行く。早朝、雄鶏をもって、司祭のところへいくのである。「まだ寝ていますか」と遠くからよびかける。司祭は自分では出ていかず、家人をやって依頼の内容を聞き、現金と雄鶏を渡すようにいう。母親は自分で司祭に会ってはいけないとされる。

司祭は小屋の中で雄鶏に向って「寝ろ」と命ずる。すると鶏はぱったりと倒れて小屋の中央で眠ってしまうと

(呪言5)

Ere ka muta kojokunar, ere ka muta konyon, ere
ka muta kolakar. Ere ka muta ibaren kojaas.

各人から二シリングもらい、手を洗う。一シリング貨

いう。

やがて依頼人の女性には男児を出産する。その男児はすこやかに成長するが、思春期を迎えても、恋愛の相手に恵まれない。すべての娘たちが「彼」を拒否するのである。何故ならその青年は実は本来「女性」であって、「作られた」男性だからである。そこで「青年」の家族はイカマリニヤン・クランの人々を招待し、「祝福」を求める。

司祭を先頭にクランの人たちは早朝依頼人の家を訪問する。そこには牛一頭がつながれている。司祭は家人に家から出るようによびかけ、一同家の外に出て座る。司祭はひょうたんに水を入れ、家人一同にふりかけ、次のような「祝福」のことばを与える。

(呪言5の訳)

誰それ(その人物)の家に幸いあれ、栄えあれ、食物に欠くことなかれ、牛がたくさんいるように。

幣を顔に押しあてる。手を放してもそのコインは落ちな

(11) 呪詛と祝福

い。ビールが出され、司祭はその青年と同じひょうたん、同じ壺からビールを一緒に飲む。一ヶ月もたてば、その青年は必ず配偶者をみつけることができる。

(2)、不妊の女性に子宝を与えること。

どうしても子供のできない女性もいるが、子供のできない原因が本人以外にあることも多い。イカマリニヤン・クランはその原因を取り除いて、不幸な女性に子宝を授けることができる。この原因には、①生者による邪術、②死霊のたたり、③古い呪詛の残存などが考えられる。

邪術の場合には、それを行った者を呪詛することによってその邪力の源を解消してしまう。死霊に対しては、もうたたらないように「よびかける」*akimur*。これは神エデケの力を借りて死霊を説得するのである。古い呪詛に対しては、口の二つある壺（双子儀礼に用いられるもの）⁽⁴⁾と双子の太鼓を用いる。こうした治療的行為も、不妊の原因を取り除いて幸福をもたらすという意味で「祝

(呪言6)

Emabir ngol, kigwok ijo koloto kitania idwe kon,
koloto kitania idwe kon.

福」の範疇に入るとオカンボ氏は考えている。

6 イカマリニヤンのその他の復讐

オカンボ氏によると、このクランは邪術 (*akimur*) によって殺された者の復讐もできるという。ビールの壺にビールを飲むのに用いる管をさし入れて死者によびかける。「もしお前が邪術で殺されたのなら、お前を殺した者もお前の後を追うだろう」そう唱えながら、その管を小屋の中から戸口の方へ向って投げるのである。

イカマリニヤン・クランの能力がよく知られているのは、飛んでいるトビを呪詛によって落とすことができることである。これは呪詛のために犠牲にしたヤギや牛の肉を分配しているときに、その肉をさらったトビ（これは実際にしばしば起る）にかけるものである。彼らは肉を解体するナイフの刃先を地に向けて次のように唱える。

(呪言6の訳)

敵よ、お前はその肉をもっていってお前の子供たちに食わせてやれ。もっていった子供たちに食わせて

Kere lolong ibongun bati nepene kakiring.

Abongu? Abongu.

この呪言とともにトビは地上に落ち、殺されるという。

7 呪詛司祭の死と継承

伝統的に首長制をもたず、年齢組織と戦争リーダーと予言者とが政治的機能を果たしていた平等的なテソ社会で、一つの小クラン内とはいえ、呪詛司祭 *lobelaman* のような「役職」が形成されたことは興味深い。父から子への世襲もあるが原則は人物本位に継承されるもので、後継者たる条件は、争いを好まぬ温厚な人物とされている。通常司祭とともに行動している助祭的人物の中から選ばれるのだという。

司祭が重病になったり、死んだりすると、後継者の選定が行われる。ビールが醸造され、黒い雄ヤギが供犠される。ビールは双子儀礼と同じように、口の二つある壺に入れられる。クランの全員が集り、後継候補に「今日

やれ。

もしお前の運が悪ければ、お前はその肉といっしょにここに落ちてくるだろう。

落ちたか、落ちた。

から呪詛司祭になるのがお前の仕事だ」という。後継者はクランの成員に対し、その仕事をひきうけることを述べる。そのあとでビールとヤギ肉の共飲共食が行われる。

前任者の主妻から、「呪詛」のひきつぎが行われる。

それは、これまで行われた呪詛の際に「呪い」を入れたひょうたんが用いられ主妻がそれを保管していたが、それを後継者にひきわたすのである。それに、牛を供犠するときに吹く角笛も伝えられる。現職のイボティカイ氏の場合、この引き継ぎはまだ行われず、角笛とひょうたんは前任者エバエ氏の妻が保管しているという。

司祭が死ぬとその葬儀では黒い雄牛、雄ヤギ、雄鶏を供犠し、司祭が「良い所」へ行くように祈る。墓はふつうの人の墓と違って、上に仮小屋を立てる。(私はエバエ氏の墓を訪れてみたが、その小屋はすでに跡かたもなく朽ち果てていた。)一年後クランの成員たちはこの墓

に詣り、黒い雄牛を供犠しビールを飲んで死者の霊をなぐさめる。

8 イカマリニヤン・クランの活動事例

最初に述べたごとく、私はこの呪詛クランが呪詛のために出勤したところを実際に見たことはなく、以下に述べることはすべて聞いたことである。

事例(1) チャマシリ小学校焼討ち事件

一九六二年に、このクランの一員であるオスク・バ氏が校長をつとめていたチャマシリ小学校が放火によって焼失した。バ氏は政治に関心が深く、おそらく独立時の政争を背景とする放火だったと思われる。行政首長や地元警察をはじめ多勢の人々が集ったが、誰の指示で放火が行われたかについては誰も黙して語らなかった。そこでイカマリニヤン・クランは集合し、エチチクワの木をかつぎ、黒いヤギ、黒い牛を連れて現場へ向った。人々はこれを見て恐れおののき、「死がやってきた」と口ぐちに叫んだ。有力者たちは集って相談していたが、イカマリニヤンの成員たちのところへきてこういった。「この事件については我々は誰のせいだか知っている。

どうか手をひいてほしい」⁽⁵⁾ そういつてイカマリニヤン・クランの成員一人一人に二〇シリングの現金を渡したという。

事例(2) イガンガの放火事件

ウガンダのブソガ地方の町イガンガにテソ族の家族が住んでいたが、家が放火されて焼失したのでその一人がケニアに来てイカマリニヤン・クランに報復を依頼した。行ってみると現場に何人かのバソガ人（ブソガ地方に住む民族）が見に来ていた。司祭は彼らが犯人ではないかと疑い、呪詛をかけて殺した黒ヤギの肉を食べないかと言ってみた。バソガたちは肉をうけとらず姿を消した。司祭は焼跡の灰には罫いをして踏まないように（呪詛がかけていて危険だから）と助言してからケニアに戻った。やがてすぐにバソガの一人が死に、しばらくして彼らの娘の一人が死んだ。彼らが犯人だったのである。

事例(3) 牛泥棒

モディン地区で牡牛が一頭盗まれた。二人の男が盗んで藪の中でその牛を殺し、前肢と後肢をもち帰り、胸部と背中の一部を残していった。イカマリニヤン・クランは牛の所有者の依頼によって、牛が殺された場所を見て

からその所有者の家で呪詛を行った。そこへ一人の男が来たので、何しに来たのかと聞くと、ただ見に来ただけだといった。三種の木が植えられた。やがて一ヶ月後に、その男の子供が死に次いで娘一人、老女一人、計三人が死んだ。その男は呪詛を解いてもらうために、いずれ近いうちにやって来ざるを得まいと司祭は考えている。

事例(4) 解呪

十七年前に、クルシャンデットに住むサバオト族の男が盗みを働き、克蘭の呪詛をかけられた。彼の家族は次々と死んでいったが彼は何もなかった。しかし、とうとう子供が一人になり、父も死にかかると、呪詛を解いてくれるよう頼んできた。そのためには、十七年前に植えた呪詛の木を根ごと引きぬかなければならなかった。

司祭はまず木の根元にある種の草をまきつけてから白い雄鶏を殺してその血を木の幹にふりかけた。司祭はそのあとでは直接何もせず、贈られたビールを飲みながら克蘭の成員たちが木をひきぬき、根も残らず掘り出し、それらを粉々にくだくのを見ただけだった。翌朝黒い雄牛が殺されたが、殺す前に司祭は牛の鼻をナイフで叩きながら、生き残った(呪詛をかけられた)人々の名

を告げた。司祭は供犠した牛の頭部に対して権利をもっているという。

事例(5) 祝福

フェストゥスの所の男児はイカマリニャン・克蘭に頼んでできた子供だった。ところが彼の家族で若い弟が死に、次いで女の子が死んだ。フェストゥスが占師にみてもらうと、祈ってもらったできた男の子がいるのだから、イカマリニャン・克蘭の人々のためにビールを醸造して招待しなければいけないといわれた。そこで彼はビールを造り、克蘭の人々を招待した。それ以後彼の一族には不幸はない。こうした「祝福」のために供犠した家畜の肉は、たとえ生れたてだろうと、すべての子供に食べさせなければいけないという。

事例(6) 古い呪詛

一九七九年九月、第二回目の調査のために私が北テソ・ロケーションのアングライに住みこんだ日の夕方、近所で子供が一人死んだ。通夜に集った人々は死因について語り合ったが、死霊のたたりとする者と、土地争いにまつわる邪術のせいだとする者に分れた。ところが一週間後、その子供の次の子も死んでしまった。この連続

(15) 呪詛と祝福

死は人々を混乱におとし入れた。子供の母の兄弟は子供の父をなじり、占い師にみてもらうと呪詛に違いないといわれた。誰もがどのような侵害に対して呪詛がなされたのか思いあたらず、議論は次々と過去の事件を想起するという形で続けられた。結局皆が一応納得した死因は、四代前の古い呪詛が依然として効力をもっているというものであった。その家族の祖先が昔友人たちとわなを用いる狩猟に出かけた。ところが獲物の配分で争いが起り、わなの所有者は一片の肉をも与えられなかった。そこでその所有者がイカマリニャン・クランに呪詛を依頼したに違いないというのである。

一般に、一族における連続死は呪詛のせいになされることが多い。占いの結果にもそのことがはっきり出ている。⁽⁶⁾

9 イカマリニャン・クランの評判

テソ社会において、このクランは結婚や日常の社交において差別はうけていないし、特に尊敬されているわけでもない。しかし、「恐れられている」ことはたしかである。彼らの呪詛は社会的には正当性をもっていること

その力は神エデケに由来しているとされていることは誰でも知っている。かつて、イカマリニャンが司祭を先頭に呪詛の木をかついで、役場の中央広場を横切ったときには、行政首長のオデラ氏は「お前たちのやることは神とともにあるのだから」といって通してくれたことがあるというエピソードは他のクランの者にも知られている。しかし、彼らがその能力を私欲のために使いはしないだろうか、あるいはごくさやかな罪に対して、連続死という恐ろしい制裁を濫用しはしないだろうかという疑いをもたれていることも否めない。主として南テソ・ロケーションで調査していたI・カープは、そこで聞いた北テソのイカマリニャン・クランの評判を次のように記している。

Chamasiri sub-location in North Teso location is believed to be full of poisoners.

.....I was warned, that if I happened to go there, not to drink from a well or even chew a blade of grass because poison was spread on these in order to kill unsuspecting strangers.

Beer drinking, of course, or eating food was out of

question. One of the reasons that Chamasiri is so notorious is that many of the clan Ikamarinyang live there and their power to curse makes them automatically suspect' (Karp, p69).

七年後に私も全く同じ忠告を他のクランの人々からうけている。しかしここには明らかに「毒」を用いる邪術と、「呪詛」との混同があり、その背景にはすでに事例(1)で述べたごとく、このクランの有力者が政治的にこの地域の権力者である国会議員と対立関係にあったという事情を反映している面もあろう。一般的に誰もが同意することは、このクランの成員の多い地域では盗みが少ないということである。

10 比較研究のための覚書

イカマリニヤン・クラン同様、呪詛力をもつとされる北テソ族のイスレタ集団については断片的に報告したことがあるが、ここでイカマリニヤンとイスレタの異同を比較しておく。

この対照表から二つの呪詛集団の間には、(1)集団原理、(2)呪詛の場、(3)色のシンボリズム、(4)単語という四つの

集団の性格	イカマリニヤン	イスレタ
呪詛司祭	父系クラン(氏族) アリ	儀礼集団エテム ナシ
呪詛の場	被害者の住居	藪の中の蟻塚
呪詛の理由	盗み、放火	盗み、債務
呪詛に用いる動物	黒い雄牛、黒い雄ヤギ、黒い雄鶏 (羊は用いない)	白い羊
解呪に用いる動物	白い雄鶏、羊を除く、黒い雄の家畜	黒い山羊
呪詛の結果	連続死	連続死
呪詛ということば	abikam	aigat
祝福ということば	abigat	
祝福する力	アリ	ナシ
トビを落とす力	アリ	アリ
雨をとめる力	ナシ	アリ

レベルで違いがあることがわかる。第四の単語レベルでは、ケニアでは「祝福」を意味する *abigat* が、ウガンダではまさに「呪詛」の意で用いられているのである。したがってこの *gat* という語根の理解は「呪詛」と「祝福」という対立に発展する以前の、「神秘力の正当な行使」といった意味が含まれているのかもしれない。たとえば、言語的に同系のウガンダのカリモジーン族には

(17) 呪詛と祝福

ehagatan ということばがあり、ダイソン＝ハドソンはこれを「祈りのリーダー」*prayer leader* と訳している。このリーダーとは、長老たちが集合的に「祝福」を与えたり「呪詛」をかけたたりするときのリーダーである。⁽⁸⁾

また、テソ族に隣接するウガンダのランギ族は、言語的にはナイル語系ではあるが語彙や歴史文化ではテソ族と共通する点も多い。このランギ族には *gato* という名の儀礼がいくつかあり、カーリーはこれを一般的に「祝福儀礼」と訳しているが、ただ一つ、*gato akwo* という儀礼には *Cursing a thief* という訳をつけている。⁽⁹⁾ この儀礼は内容的にもテソの二つの呪詛集団の呪詛と共通し、同一起源と考えられる。全体としてこの *gato* という語根はナイル語系ではなくバラ＝ナイル語系のもものと想定できる。

これに対し *akiam* という語の語根 *lam* は明らかに本来ナイル語系の語である。ヌアー族やディンカ族についての民族誌ではこの語は *invocation* (相手にことばで働きかけること) と訳されているが、⁽¹⁰⁾ ランギ族でもケニアのルオ族でも *lamu* という語は働きかける相手によって「呪詛」とも「祝福」ともとれる用法がある。ウガ

ンダの北テソ族では *ulam* という語は個人的な侵犯の結果を指しているようである。たとえば、人妻が姦通を犯したために子供が病気になるたり、クランのタブーを破ったために不妊になったりするときに、この語が用いられる。⁽¹¹⁾

本論で扱ったような、呪詛を専門とする集団は、東アフリカではテソ族以外には報告されていない。ランギやカリマジョンあるいはヌアーなどで、長老たちが集合的に呪詛したり祝福したりすることはあるが、集団ではない。いずれにしても、東アフリカの研究史において、呪詛と祝福、宣誓に関する記述と論考は、邪術研究に比して極度に乏しいのである。理論的には、世俗権力との対比における宗教的権威の所在として呪詛に言及したグラックマンや、⁽¹²⁾ 牧畜社会と呪詛、農耕社会と邪術という組合せを示唆したバクスター⁽¹³⁾ など、今後の展開を可能にするような見解もないではないが、全体としては不当に軽視されてきたテーマといえよう。筆者としては、一方では政治体系における権威の問題、他方では文化的表現形態(儀礼)の問題として、今後も追及していきたい分野である。

- (1) 本稿の要旨は昨年五月富山大学で行われた日本民族学会第一九回研究大会で報告した。資料はすべて、文部省科学研究費補助金によって行った現地でのフィールドワークにおいて筆者が収集したものである。
- (2) インタヴューの内容は録音から書き起したもので、筆者の調査助手、ジョセフ・エラウナ君の努力に負うところが多い。
- (3) 裸になって尻の穴を見せるからという。
- (4) 双子は神の使者と考えられている。
- (5) この抗争は、一九七九年の総選挙で落選するまで国会議員の座にあった人物とババ氏との間のもので、この焼打ち議員側の仕業であることは明白だったという。
- (6) 筆者はA・オニヤビディという占師による占いの事例を三百ほど記録したが、その中で連続死はすべて呪詛のためとされている。
- (7) 長島、一九七二、八六—八八頁。
- (8) Dyson-Hudson, p. 165, 182-183.
- (9) Curley, p. 62.
- (10) Evans-pritchard, 1956, p. 165. Lienhardt, pp. 174, 236.
- (11) 長島、一九七二、一八六頁。
- (12) Gluckman 1965, p. 110.
- (13) Baxter, p. 172.

REFERENCE

- Baxter, P. T. W., 1972, 'Absence makes the heart grow fonder: some suggestions why witchcraft accusations are rare among East African pastoralism', in Gluckman (ed) 1972.
- Curley, R. T., 1973, *Elders, Shades and Women*, University of California Press.
- Dyson-Hudson, N., 1966, *Karimojong Politics*, Oxford at the Clarendon Press.
- Evans-Pritchard, E. E., 1951, *Kinship and Marriage among the Nuer*, Oxford at the Clarendon Press.
-, 1956, *Nuer Religion*, Oxford at the Clarendon Press.
- Gluckman, M., 1965, *Politics, Law and Ritual in Tribal Society*, Basil Blackwell, Oxford.
-, (ed), 1972, *The Allocation of Responsibility*, Manchester University Press.
- Hailey, T. T. S., 1947, *The Anatomy of Lango Religion and Groups*, Cambridge at the University Press.
- Kap, I., 1978, *Fields of Change among the Ileso of Kenya*, Routledge and Kegan Paul.
- Lienhardt, G., 1961, *Divinity and Experience, the Religion of the Dinka*, Oxford at the Clarendon Press.
- 長島信弘、一九七二『チン民族誌』中公新書。